

9月17、18日、宇都宮で第37回国際幼児教育学会が『子育て文化の創生』をテーマに開催されました。絵本部会は「ワークショップ《字のない絵本》あそびましょう！」を実施しました。

①字のない絵本の解説、②『どうぶつのおやこ』の読み合い、③字のないミニ絵本制作の3部構成120分。参加者は、事前募集の保育現場の先生方と当日先着自由参加の方との二人一組の計18名。後者は保育者養成校の先生や園長先生たちで、遠くアメリカ、中国、韓国から見た先生方も場を盛り上げて下さいました。

①では、《字のない絵本》が近年注目されている背景には、生活文化伝承力の弱まりを危惧し、直接的な人と人との繋がりや、五感を駆使し手や体全体を使う『ものづくり』への強い思いがあること。またITの浸透とグローバル化に伴い、難民となったシリアの子どもたちの情報が直ちに世界に発信され、迅速に字のない絵本を届ける動きが高まったことなども、その理由として挙げられるのではないかと話題を投げかけました。

参加者に配布した《字のない絵本》資料リストから、特徴として(1)普遍的な芸術性の高さ、深いメッセージ性があるものが多い。(2)沈黙の中で自然との対話を誘い、五感を研ぎ澄ませ鋭敏な感性を培う。(3)《字のない絵本》が子どもの想像を促し、創作意欲を喚起し、言語教育に有効だと考えられてきている、などを挙げ(1)の例として『アンジュール』『ゆきだるま』『アライバル』(2)にはイエラ・マリの作品、『ジャーニー』『おはなをあげる』などを取り上げました。(3)は字のない、また少ない赤ちゃん絵本すべては、読み聞かせは声のスキンシップといわれるように親子でまた園で会話が弾むうちに、無意識にことばを溜めていくという話をしました。

次の②『どうぶつのおやこ』では大人役と子ども役になって、猫、ウサギ、犬、猿、かば、きりん、ライオン、象と、見開き毎に対話を楽しみました。子ども役になると、発想が不思議に自由になるようで、かばがなぜ一頭しか子どもがいないのとか、なんでこの子熊さんだけ立っているかを質問したり、小象が鼻を絡ませているのはね、と大人役に子役がストーリーを話しかけたり、役を交代しながら、役になり切り楽しい時空が生まれました。

《字のない絵本》は、会話量も多く、高度な言葉を使い、語彙も多いという調査もあるようです。韓国から見た先生が、お孫さんが毎晩お気に入りの《字のない絵本》持ってきて、同じ話をする、違う話をするように求められ、困ったとおっしゃり、大笑いになりました。

A4の用紙をたたんで、3画面の《字のない絵本》を二人組で作る③のコーナーでは、9冊のユニークな作品ができました。見開きわずか3つの場面展開で、まず初めに描いた方の絵を次の方が発展させ、またその画面を見て、絵だけでわかるストーリーを描いていました。表紙に題と二人のサインをし、裏表紙に販価も記入。中国チームはあめが降ってきた、あま宿り、最後は「雨」いう象形文字！プレゼントが赤ちゃんのチーム、ハッピーエンドにしないチームもあり、印象深いワークショップでした。

学会会報もご覧ください！ 絵本部会会員募集中！ 今回担当：山田・劉・森・上田・山岡・宮地